

『今年の春は』

西脇市病院事業管理者・病院長 岩井正秀

梅が香り、春一番が吹き抜け、やがて桜の花が咲き乱れる。毎年見られるこの季節の風景。しかし、少し違う、今年の春は。

気温の上昇があり、水が温み、飛散する花粉が鼻腔を刺激しても、少し違うのだ、今年の春は。

卒業式があり、入学式がある。別れがあれば、出会いもある。期待と不安が混じる中にも、高鳴る気持ちが、少し違っているのだ、今年の春は。

三年間に及ぶ新型コロナウイルスとの長い戦いがあった。まだ決して油断はできないが、春の訪れと共に感染者数は低下し、国も方針の転換を示している。

何度か、危機もあったが、西脇病院はここまで良く戦ったと、自分たちに声をかけた。駐車場の中にテントで始めた発熱トリアージ外来、突貫工事を行ったコロナ病棟や救急外来など、スタッフは過酷な状況の中、全力で診療に当たってくれた。本当に感謝の言葉しかない。

病院スタッフだけではなく、医師会をはじめ非常に多くの方々からも支援をいただき、それはかけがえのない勇気となった。さらに、病に立ち向かう患者さん達から教えられることも数多くあった。地域を挙げての戦いというものを、今回初めて私達は経験したのである。

新型コロナウイルスが強い勢力を持っている時期に、何よりも病院を悩ませたのは、一般の救急に対する影響であった。空床があってもコロナ用ベッドが満床のため、救急を制限する必要があり、苦渋の選択となったことも多い。実際、救急で受け入れた患者さんが高い確率でコロナ陽性と判明する期間も何度かあった。

蔓延期には、多くのスタッフやその家族もコロナ陽性となったため勤務ができず、残った者たちは短い間隔で厳しい業務に向かわなくてはならなかった。それでも皆が力を合わせ、何とかここまで幾多の山を乗り越えて来たのだ。

この三年間の、常に緊張感を持って対応した新型コロナウイルスとの戦いは、各個人としても、また病院全体としても、苦しかったが、得る所の多い経験であった。これからも新型コロナのさらなる波や、未知の感染症が発生する可能性はあるだろう。そして、その時、この経験は大きく生きると確信している。

この先、新型コロナウイルス感染症の勢いが、緩やかに、しかし確実に縮小していくのであれば、少しずつでも以前のような、暖かくて親密な人と人の交流を取り戻していきたいと願わずにはいられない。

外に出ると、吹く風も優しい。そっとマスクを取ったら、空に向かって、とびっきりの笑顔を見せようじゃないか、今年の春は。